対人ストレスユーモアコーピングが敵意、意識的防衛性と抑うつに及ぼす影響¹

楳本 知子 東亜大学 山崎 勝之 鳴門教育大学

The effect of humor coping with interpersonal stress on the relationship between cynical hostility, conscious defensiveness, and depression

Noriko Kunugimoto (University of East Asia) and Katsuyuki Yamasaki (Naruto University of Education)

This study examined the effect of humor coping with interpersonal stress on the relationship between cynical hostility, conscious defensiveness, and depression. University students ($N = 375$; 214 men and 161 women) participated in a questionnaire survey. The results of hierarchical multiple regression analyses by sex showed that humor coping with interpersonal stress alleviated the detrimental influence of cynical hostility on depression only for men with low conscious defensiveness. For women, humor coping with interpersonal stress played a role in alleviating depression independently of hostility and conscious defensiveness. These findings suggest that there are differences between men and women in the role of humor coping with interpersonal stress in affecting depression. Methodological limitations of the present study are discussed, along with possible improvements for future studies.

Key words: humor coping, interpersonal stress, cynical hostility, conscious defensiveness, depression.

The Japanese Journal of Psychology
2011, Vol. 82, No. 1, pp. 9-15

閾値下抑うつ (subthreshold depression) はうつ病の診断基準を満たさないレベルの軽度の抑うつを指し (Cuijpers & Smit, 2004), 大学生の重大な健康問題の一つになっている (楳本・山崎, 2008)。青年期の閾値下抑うつは成人期でのうつ病発症および自殺行動の危険因子であると報告されている (Fergusson, Horwood, Ridder, & Beautrais, 2005)。Harrington & Clark (1998) によると, 青年期における閾値下抑うつの予防は将来的なうつ病発症の予防因子になり得る。一方で, 閾値下抑うつ者がすべて将来うつ病を発症するわけではないため, 閾値下抑うつ者のなかでどのような要因をもつ人が将来うつ病を発症する危険性が高いのかを特定する必要性が指摘されている (Cuijpers & Smit, 2004)。したがって, 閾値下抑うつ

の影響要因を特定し予防方策を見出すことが, 青年の精神的健康を長期にわたって維持するための鍵になると考えられる。大学進学率の高まりを背景に精神的健康問題を抱える大学生の増加が指摘され, 大学生の精神的健康の改善および維持・促進が重要課題となっていることから (及川・坂本, 2008), 本研究では大学生を対象に検討する。

楳本・山崎 (2008) は閾値下抑うつへの影響要因として敵意 (hostility) と意識的防衛性 (conscious defensiveness) というパーソナリティ概念に着目し, 検討を行っている。敵意とは他者に対する猜疑的な見方や皮肉的でネガティブな認知の仕方, 態度を示す概念で (Smith & Frohm, 1985), 敵意の高い人は対人関係で怒りや恨みを頻繁に生じ, 強い対人ストレスを繰り返し経験することで抑うつに陥ると考えられている (楳本・山崎, 2008)。意識的防衛性は“自分自身の社会的に望ましくない特徴やネガティブな側面を他者に悟られないように意識的に抑制し隠す傾向”と定義される概念で, 敵意と抑うつの関係を増幅する要因として扱われている (楳本・山崎, 2003)。楳本・山崎 (2008) は大学生を対象として調査を行った結果, 男女ともに抑うつを強める要因は敵意であるが, 女性の

Correspondence concerning this article should be sent to: Noriko Kunugimoto, Faculty of Human Science, University of East Asia, Ichinomiyagakucho, Shimonoseki 751-8503, Japan (e-mail: nkunugim@tousa-u.ac.jp)

¹ 本研究は, 第一著者が兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科に提出した 2008 年度博士論文の一部を加筆・修正したものである。また, 本研究の一部は, 日本心理学会第 73 回大会にて発表された。

場合に敵意が極めて高くなれば意識的防衛性の低さが敵意の抑うつに対する正の影響力を増幅する傾向のあることを示唆している。敵意が高く意識的防衛性の低い女性の場合、相手に対して抱く不信や猜疑心を露骨に表出するため、対人関係の悪化を招き対人ストレス状況が持続することで抑うつが強まるのではないかと説明されている(楳本・山崎, 2008)。以上のことから、高敵意または高敵意と低意識的防衛性の組み合わせが対人ストレスを引き起こし、それにより閾値下抑うつに陥る可能性が考えられる。よって、敵意または意識的防衛性という抑うつ増強要因をもつ大学生にとって、対人ストレスの低減が閾値下抑うつ予防の鍵になると思われる。

一方、対人ストレスに対処するための方略の一つに、ユーモア(humor)を用いるコーピングがある。これは対人場面でストレスフルと評価されたときに、互いの気持ちが和むようなおかしみを表出する、その状況についてジョークを言う、または笑ってすませるという形でユーモアを使う対処方略である(楳本・山崎, 2010)。そもそもコーピング方略としてのユーモアとは、一般的に“ストレスフルな状況についての見方を変え、さほど脅威的ではない新しい視点からその状況を捉え直す方法”と捉えられている(Martin, 2007)。このような状況を捉え直す認知的なユーモアコーピングと、対人ストレス場面でユーモアを使用するコーピングを区別するために、本研究では後者を対人ストレスユーモアコーピングと呼び、ストレスフルな対人場面で互いの気持ちが和むように、その状況についてジョークを言う、または笑うという形で対処する仕方と定義する。

対人ストレスユーモアコーピングと状況を捉え直す認知的なユーモアコーピングの違いは、主に次の3点であると言える。第一に対人ストレスユーモアコーピングではコーピングの対象が対人場面に限定されているが、ユーモアコーピングはストレスフルな状況全般を対象にしているという点で異なる。次に、対人ストレスユーモアコーピングは対人場面でストレスフルと感じたそのときに即座に機能するものであるが、ユーモアコーピングは持続的なストレス状況におかれたときにも行われるという違いがある。3点目として、対人ストレスユーモアコーピングは、ユーモアコーピングには含まれていない対人的機能も有しているという違いが挙げられる。ユーモアの対人的機能とは、集団内でメンバー同士が笑いやおかしみを共有することにより、集団内で生じる緊張と葛藤を低減させ集団凝集性を高めることを意味する(Ziv, 1984 高下訳 1995)。日本ではウチ集団で笑い合える関係を維持することが重要視され、家族や友人、仲間など親密な関係にある人との間で笑いやおかしみが共有されることから(大島, 2006)、対人ストレスユーモアコーピングの機能

は、主にウチ集団での対人場面で経験される軋轢や葛藤を回避または低めることで対人ストレスを予防または低減することであるとされている(楳本・山崎, 2010)。

対人関係で経験されるネガティブな出来事が多いほど、抑うつレベルは高くなる(小平・小塩・速水, 2007)。しかし、対人場面でストレスフルと評価されるまさにそのときに、対人ストレスユーモアコーピングを用いて、相手と一緒に笑ったり互いの気持ちが和むようなジョークを言えば、対人ストレスの予防または低減を図ることができ、閾値下抑うつ予防につながると考えられる。本研究では、閾値下抑うつ緩和要因として対人ストレスユーモアコーピング、閾値下抑うつ増強要因として敵意と意識的防衛性に焦点を当てる。大学生を対象にして、対人ストレスユーモアコーピングが敵意、意識的防衛性、抑うつに関係に及ぼす影響について検討することを目的とする。

方 法

調査対象者

東北、中国および九州地方に所在する六つの4年制大学の学部生を対象とし、407名の協力を得た。回答に不備のあった32名を分析から除外した。分析対象者は男性214名(平均年齢19.46歳, $SD1.12$)、女性161名(平均年齢19.64歳, $SD1.03$)の合計375名であった。

調査内容

敵意 敵意の測定にシニシズム尺度(Cynicism Questionnaire: 以下CQとする, 井澤・野村, 2004)を用いた。CQはBarefoot, Dodge, Peterson, Dahlstrom, & Williams (1989)に基づいてCook-Medley Hostility Scale (Cook & Medley, 1954)からその中心的概念であるシニシズムを測定する6項目を選出し、日本語版として開発された1次元尺度の質問紙で、基準関連妥当性と信頼性が確認されている(井澤・野村, 2004)。CQにおけるシニシズムとは他者に対する皮肉的でネガティブな態度や認知を指す(井澤・野村, 2004)。回答形式は5件法である。

意識的防衛性 意識的防衛性の測定には、意識的防衛性質問紙(Conscious Defensiveness Questionnaire: 以下CDQとする, 楳本・山崎, 2002)を用いた。CDQは16項目から構成される1次元尺度の質問紙で、構成概念妥当性と信頼性が確認されている(楳本・山崎, 2002)。CDQでは、回答者自身が各項目の示している特徴や行動傾向をもっていると仮定して考えるように教示され、そのことを他の人に知られると嫌だと感じる程度について5件法で回答を求める形式がとられている。

対人ストレスユーモアコーピング 対人ストレスユーモアコーピングの測定尺度として対人ストレスユーモア対処尺度 (Humor Coping with Interpersonal Stress Scale: 以下 HCISS とする, 楳本・山崎, 2010) を用いた。HCISS は 12 項目からなる 1 次元尺度で, 構成概念妥当性と信頼性が確認されている (項目例: 相手と気まづくなったりしたら, なにかおもしろいことを言って一緒に笑う)。回答形式は“まったく行わない”から“よく行う”の 5 件法である。

抑うつ 抑うつの測定尺度として Radloff (1977) による Center for Epidemiologic Studies Depression Scale (CES-D) を島・鹿野・北村・浅井 (1985) が邦訳したものを用いた。CES-D は, 一般母集団におけるうつ症状を疫学的に研究するために開発された尺度で, 併存的妥当性, 臨床的妥当性ならびに信頼性が確認されている (島他, 1985)。うつ病の主要症状に関する計 20 項目から構成され, 各項目について過去 1 週間に経験した頻度が 4 件法で評価される。

調査手続き

各大学の講義時間内に記名式で行った。本研究の目的とプライバシーの保護について文書と口頭で説明を行い, 受講学生に調査への協力を依頼した。その際, 調査への不協力が成績評価に影響することはないと説明を加えた。記名を望まない場合は無記名で構わないが, 自分のデータの個別フィードバックを希望する学生は名前と連絡先を記すよう伝えた。調査協力の得られた受講学生に対して最初に CES-D を実施した。CES-D 以外の質問紙については提示順序として次の 3 通りを用意し, 調査対象者ごとにカウンターバランスした。(a) CDQ, HCISS, CQ の順, (b) CDQ, CQ, HCISS の順, (c) HCISS, CQ, CDQ の順の 3 通りであった。なお, 個別フィードバックを希望した調査対象者には, 調査終了後にメールまたは封書郵便で個人データおよび全体の平均値と標準偏差を個別にフィードバックした。

結 果

各測定尺度における平均得点と性差の検討

Table 1 に各測定尺度における平均得点と標準偏差を男女別に示した。性差に関して, 敵意は女性よりも男性の方が高く ($t(373) = 2.73, p < .01$), 意識的防衛性は男性よりも女性の方が有意に高かった ($t(373) = -2.89, p < .01$)。対人ストレスユーモアコーピングと抑うつについては有意な性差は見られなかった。

階層的重回帰分析の結果

対人ストレスユーモアコーピングが敵意, 意識的防衛性, 抑うつの関係に及ぼす影響を検討するために,

Table 1
各測定尺度における男女別の平均値と標準偏差

		男子大学生 (<i>n</i> = 214)	女子大学生 (<i>n</i> = 161)
CQ	敵 意	19.87 (4.28)	18.68 (4.02)
CDQ	意識的防衛性	50.74 (10.98)	53.91 (9.82)
HCISS	対人ストレス HC ^{a)}	34.61 (8.01)	35.89 (7.16)
CES-D	抑うつ	17.32 (9.72)	17.11 (10.09)

() 内は標準偏差。

^{a)} 対人ストレスユーモアコーピング。

CES-D 得点を目的変数として, 4 ステップからなる階層的重回帰分析を行った。第 1 ステップで説明変数として性, 敵意, 意識的防衛性および対人ストレスユーモアコーピングを投入した。第 2 ステップで 2 要因交互作用項計 6 個をすべて加えた。第 3 ステップでは 3 要因交互作用項計 4 個をすべて加えた。第 4 ステップでは性×敵意×意識的防衛性×対人ストレスユーモアコーピングの 4 要因交互作用項を加えた。性に関しては, 男性を 1, 女性を 0 とした。多重共線性を回避するために, Aiken & West (1991) にしたがって説明変数の測定値をすべて各平均値との偏差に変換し, この変換値を重回帰モデルに投入した。

階層的重回帰分析の結果, 第 1 ステップにおける重決定係数は有意であった ($R^2 = .08, p < .001$)。第 2 ステップにおける重決定係数の増分は有意でなかった ($\Delta R^2 = .02, ns$)。第 3 ステップにおける重決定係数の増分も有意でなく ($\Delta R^2 = .01, ns$), 3 要因交互作用項で有意なものはなかったが, 第 4 ステップにおける重決定係数の増分は有意であった ($\Delta R^2 = .02, p < .01$)。

そこで, 説明変数から性を外して 3 ステップからなる階層的重回帰分析を男女別に行うことにした。Table 2 に男性の階層的重回帰分析の結果を示した。男性の場合, 第 1 ステップにおける重決定係数は有意であり ($R^2 = .07, p < .01$), 敵意が高くなるにしたがって, 抑うつは強まることが示された ($b = .60, \beta = .26, p < .001$)。第 2 ステップにおける重決定係数の増分は有意でなかったが, 第 3 ステップにおける重決定係数に有意な増分が認められ ($\Delta R^2 = .02, p < .05$), 敵意×意識的防衛性×対人ストレスユーモアコーピングの 3 要因交互作用項の偏回帰係数が有意であった ($b = .00, \beta = .17, p < .05$)。

そこで, Aiken & West (1991) にしたがって, 意識的防衛性および対人ストレスユーモアコーピングがそれぞれ $\pm 1SD$ の値をとったときの, 抑うつに対する敵意の単回帰直線を求めた。Figure 1 は意識的防衛性が $+1SD$ の値をとったときの, 抑うつに対する敵意と対人ストレスユーモアコーピングの交互作用の様相をグラフで示したものである。図中の敵意および対

Table 2
男子大学生の階層的重回帰分析の結果

St ^{a)}	説明変数	<i>b</i>	β	<i>t</i> 値	ΔR^2	<i>F</i> 値変化量
1	敵意	.60	.26	3.92***		
	意識的防衛性	.05	.06	0.89		
	対人ストレス HC ^{b)}	-.01	-.01	-0.17	.07	5.25**
2	敵意×意識的防衛性	.02	.08	1.19		
	敵意×対人ストレス HC ^{b)}	-.00	-.00	-0.03		
	意識的防衛性×対人ストレス HC ^{b)}	.00	.04	0.62	.01	0.76
3	敵意×意識的防衛性×対人ストレス HC ^{b)}	.00	.17	2.36*	.02	5.56*

モデル $R^2 = .10$ ($F(7, 206) = 3.42$, $p < .01$)

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$ 説明変数はすべて各平均値との偏差

a) ステップ。

b) 対人ストレスユーモアコーピング。

Figure 1. 意識的防衛性の高い男子大学生における抑うつに対する敵意と対人ストレスユーモアコーピングの交互作用

Figure 2. 意識的防衛性の低い男子大学生における抑うつに対する敵意と対人ストレスユーモアコーピングの交互作用

Table 3
女子大学生の階層的重回帰分析の結果

St ^{a)}	説明変数	b	β	t 値	ΔR^2	F 値変化量
1	敵意	.64	.26	3.40**		
	意識的防衛性	.17	.16	2.17*		
	対人ストレス HC ^{b)}	-.22	-.16	-2.09*	.12	7.07***
2	敵意×意識的防衛性	.02	.07	0.86		
	敵意×対人ストレス HC ^{b)}	.03	.08	1.11		
	意識的防衛性×対人ストレス HC ^{b)}	-.02	-.11	-1.51	.03	1.63
3	敵意×意識的防衛性×対人ストレス HC ^{b)}	-.01	-.13	-1.72 [†]	.02	2.97 [†]

モデル $R^2 = .16$ ($F(7, 153) = 4.24, p < .001$)

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, [†] $p < .10$ 説明変数はすべて各平均値との偏差

a) ステップ。

b) 対人ストレスユーモアコーピング。

人ストレスユーモアコーピングの高低は、それぞれ +1SD, -1SD の値に相当する。対人ストレスユーモアコーピングの得点が高い場合も低い場合も、敵意は抑うつに対して有意な正の効果を示した (各々 $b = 1.01$, $\beta = .45$, $p < .01$; $b = .61$, $\beta = .27$, $p < .01$)。Figure 2 に意識的防衛性が -1SD の値をとったときの、抑うつに対する敵意と対人ストレスユーモアコーピングの交互作用の様相をグラフで示した。対人ストレスユーモアコーピングの得点が低い場合に、敵意は抑うつに対して有意な正の効果を示したが ($b = .66$, $\beta = .29$, $p < .01$)、高い場合には抑うつに対する敵意の影響は見られなかった ($b = .00$, $\beta = .00$, ns)。この結果から、男性の場合、意識的防衛性が低ければ、抑うつに対する敵意の影響力は対人ストレスユーモアコーピングを使うことにより弱められることが示唆された。

Table 3 に女性の階層的重回帰分析の結果を示した。女性の場合、第 1 ステップにおける重決定係数は有意であった ($R^2 = .12$, $p < .001$)。敵意または意識的防衛性が高くなるにしたがって抑うつは強まるが (各々 $b = .64$, $\beta = .26$, $p < .01$; $b = .17$, $\beta = .16$, $p < .05$)、対人ストレスユーモアコーピングが高くなるにしたがって抑うつは低くなることが示された ($b = -.22$, $\beta = -.16$, $p < .05$)。第 2 ステップにおける重決定係数の増分は有意でなく、第 3 ステップでは有意傾向に留まった ($\Delta R^2 = .02$, $p = .09$)。女性では、敵意と意識的防衛性はそれぞれ独立した抑うつの増強要因であり、対人ストレスユーモアコーピングは緩和要因であることが示された。

考 察

本研究では、対人ストレスユーモアコーピングが敵意、意識的防衛性、抑うつに関係に及ぼす影響を検討した。階層的重回帰分析の結果、抑うつへの影響要因は男女で異なる可能性が示された。

男性について、意識的防衛性が低ければ、抑うつに

対する敵意の正の影響力は対人ストレスユーモアコーピングにより低下することが示された。一方、意識的防衛性の高い男性では、対人ストレスユーモアコーピングのレベルにかかわらず、敵意が高くなるにしたがって抑うつは強まるという結果が得られた。意識的防衛性の低い男性で敵意が高いと、相手に対する猜疑心やネガティブな感情を露骨に表出しやすいため、ストレスフルな対人場面の経験が多くなるが、このような経験が多くなるにしたがって、対人ストレスユーモアコーピングの抑うつ緩和効果は大きくなると考えられる。つまり、敵意が高く意識的防衛性の低い男性の場合に、対人ストレスユーモアコーピングは抑うつに対して緩衝効果をもつのではないかと解釈される。

それに対して意識的防衛性も敵意も高い男性は、敵意の高さから惹起された相手への不信任感やネガティブな感情を意識的防衛性の高さから極力抑制し隠そうとするため、内的葛藤が生じる。対人場面でこのような内的葛藤が生じたときに、対人ストレスユーモアコーピングを行うことは、ネガティブな感情表出の抑制とポジティブな感情の表出という相反することを同時に行うことになる。そのため、対人ストレスユーモアコーピングを行っても抑うつは低まらないのではないかとと思われる。

女性では敵意と意識的防衛性と対人ストレスユーモアコーピングの 3 要因交互作用は有意傾向に留まり、対人ストレスユーモアコーピングは敵意または意識的防衛性のレベルにかかわらず、単独で抑うつを低めるという結果が得られた。また、敵意あるいは意識的防衛性が高くなるにしたがって抑うつは強まるが示され、楳本・山崎 (2008) と矛盾した結果となった。楳本・山崎 (2008) では敵意が極めて高くなれば、抑うつに対する敵意の影響力は意識的防衛性の低さにより増幅される傾向が示唆されている。

本研究では抑うつに有意な性差は見られなかったが、抑うつには女性の優位性のあることが広く認めら

れている (Hankin & Abramson, 2001)。楢本・山崎 (2008) では男性よりも女性の方が有意に抑うつは強く、女性の抑うつ得点の平均値 (18.05 点) は、本研究 (17.11 点) を上回っている。本研究で抑うつにおける女性の優位性が認められなかったことが結果に影響したのかもしれない。敵意と抑うつとの関係における意識的防衛性と対人ストレスユーモアコーピングの働きは、女性の優位性が見られるほど抑うつがかなり強いときに際立つと考えることもできる。いずれにしても推測に過ぎないため、女性については今後の検討課題としたい。

抑うつ影響要因が男女で異なる可能性に関して、その詳解は女性に関する今後の検討結果を待つことになるが、解釈の試みとして対人関係の取り方における男女の違いによる影響が考えられるかもしれない。例えば、男性は自分の自尊心が脅かされないように親密性が著しく高まるような行動を避けようとするが (Cross & Madson, 1997)、友人と活動を共有する傾向は強い (Gabriel & Gardner, 1999)。敵意が高く意識的防衛性の低い男性にとって、対人ストレスユーモアコーピングの使用は、親密性助長の回避と活動の共有を両立実現することにつながるため、抑うつは強まらないのではないかと考えることができる。それに対して、女性には親しい関係を大切に (Gabriel & Gardner, 1999)、相手に嫌われないように気を遣うという特徴が見られる (長沼・落合, 1998)。女性に関する本研究の結果が妥当であると仮定するならば、女性が対人ストレスユーモアコーピングを使用することは、敵意または意識的防衛性のレベルにかかわらず、相手に嫌われることなく自己表出しながら、相手との関係性も維持することにつながると考えられる。そのため、抑うつは低まるのではないだろうか。

これはあくまで一つの可能性に過ぎないが、抑うつ影響要因における男女の違いを明らかにすれば、閾値下抑うつの予防的介入に新たなアプローチを提示できるかもしれない。近来個人特性に合わせたオーダーメイド介入 (tailored intervention) の有用性が指摘されている (Richards, Enderlin, Beck, McSweeney, Jones, & Roberson, 2007)。抑うつ影響要因における男女の違いを明らかにすることは、敵意と意識的防衛性という個人特性および性に応じた予防プログラムの開発につながるため、オーダーメイド介入の実現化がある程度可能になる。今後抑うつ影響要因における男女の違いを詳細に検討することが求められる。

本研究では対人ストレスから抑うつへの道筋を想定したが、抑うつからストレスへの道筋を想定したストレス生成モデル (stress generation model) もある。ストレス生成モデルでは抑うつが心理社会的機能を低下させ、それによってネガティブな出来事が増加すると説明されている (Cole, Nolen-Hoeksema, Girgus, &

Paul, 2006)。ストレス生成モデルに基づけば、抑うつ状態にあるため対人ストレスユーモアコーピングの使用頻度が少なくなり、敵意や意識的防衛性による悪影響が際立ち対人ストレス事態に陥ることになる。本研究で得られた結果は横断的調査によるものであるため、変数間の時間的関係を明確にすることができない。因果関係について予測的研究を行うことにより検証し、明らかにする必要がある。

また、本研究では大学生を対象としたが、青年期の閾値下抑うつを予防するためには、大学生以外の青年を対象とした調査研究が必要である。今後さまざまな職種に就く青年を対象にして、対人ストレスユーモアコーピングが敵意、意識的防衛性と抑うつとの関係に及ぼす影響を検証していくことが求められる。

引用文献

- Aiken, L. S., & West, S. G. (1991). *Multiple regression: Testing and interpreting interactions*. London: Sage.
- Barefoot, J. C., Dodge, K., Peterson, B., Dahlstrom, W. G., & Williams, R. B. (1989). The Cook-Medley Hostility Scale: Item content and ability to predict survival. *Psychosomatic Medicine*, **51**, 46-57.
- Cole, D. A., Nolen-Hoeksema, S., Girgus, J., & Paul, G. (2006). Stress exposure and stress generation in child and adolescent depression: A latent trait-state-error approach to longitudinal analyses. *Journal of Abnormal Psychology*, **115**, 40-51.
- Cook, W. W., & Medley, D. M. (1954). Proposed hostility and pharisaic-virtue scales for the MMPI. *Journal of Applied Psychology*, **38**, 414-418.
- Cross, S. E., & Madson, L. (1997). Models of the self: Self-construals and gender. *Psychological Bulletin*, **122**, 5-37.
- Cuijpers, P., & Smit, F. (2004). Subthreshold depression as a risk indicator for major depressive disorder: A systematic review of prospective studies. *Acta Psychiatrica Scandinavica*, **109**, 325-331.
- Fergusson, D. M., Horwood, L. J., Ridder, E. M., & Beautrais, A. L. (2005). Subthreshold depression in adolescence and mental health outcomes in adulthood. *Archives of General Psychiatry*, **62**, 66-72.
- Gabriel, S., & Gardner, W. L. (1999). Are there "his" and "hers" types of interdependence? The implications of gender differences in collective versus relational interdependence for affect, behavior, and cognition. *Journal of Personality and Social Psychology*, **77**, 642-655.
- Hankin, B. L., & Abramson, L. Y. (2001). Development of gender differences in depression: An elaborated cognitive vulnerability-transactional stress theory. *Psychological Bulletin*, **127**, 773-796.
- Harrington, R., & Clark, A. (1998). Prevention and early intervention for depression in adolescence and

- early adult life. *European Archives of Psychiatry and Clinical Neuroscience*, **248**, 32-45.
- 井澤 修平・野村 忍 (2004). シニシズム尺度の作成と妥当性の検討 行動医学研究, **10**, 66-72.
(Izawa, S., & Nomura, S. (2004). Development and validation of the Cynicism Questionnaire. *Japanese Journal of Behavioral Medicine*, **10**, 66-72.)
- 小平 英志・小塩 真司・速水 敏彦 (2007). 仮想的有能感と日常の対人関係によって生起する感情経験——抑鬱感情と敵意感情のレベルと変動性に着目して—— パーソナリティ研究, **15**, 217-227.
(Kodaira, H., Oshio, A., & Hayamizu, T. (2007). Assumed-competence and daily strength and fluctuation of depression and hostility in interpersonal situations. *Japanese Journal of Personality*, **15**, 217-227.)
- 楳本 知子・山崎 勝之 (2002). 意識的防衛性質問紙 (CDQ) の作成と妥当性, 信頼性の検討 心理学研究, **73**, 332-339.
(Kunugimoto, N., & Yamasaki, K. (2002). Development of the Conscious Defensiveness Questionnaire (CDQ). *Japanese Journal of Psychology*, **73**, 332-339.)
- 楳本 知子・山崎 勝之 (2003). 敵意が血圧と抑うつに及ぼす影響——意識的防衛性の役割—— 心理学研究, **74**, 171-177.
(Kunugimoto, N., & Yamasaki, K. (2003). The effects of hostility on blood pressure and depression: Role of conscious defensiveness. *Japanese Journal of Psychology*, **74**, 171-177.)
- 楳本 知子・山崎 勝之 (2008). 大学生における敵意と抑うつの関係に意識的防衛性が及ぼす影響 パーソナリティ研究, **16**, 141-148.
(Kunugimoto, N., & Yamasaki, K. (2008). Conscious defensiveness, cynical hostility, and depression in university students. *Japanese Journal of Personality*, **16**, 141-148.)
- 楳本 知子・山崎 勝之 (2010). 対人ストレスユーモア対処尺度 (HCISS) の作成と信頼性, 妥当性の検討 パーソナリティ研究, **18**, 96-104.
(Kunugimoto, N., & Yamasaki, K. (2010). Development of the "Humor Coping with Interpersonal Stress Scale" (HCISS). *Japanese Journal of Personality*, **18**, 96-104.)
- Martin, R. A. (2007). *The psychology of humor: An integrative approach*. Burlington, MA: Elsevier Academic Press.
- 長沼 恭子・落合 良行 (1998). 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究, **10**, 35-47.
(Naganuma, K., & Ochiai, Y. (1998). Friendship in adolescence from the view point of association. *Japanese Journal of Adolescent Psychology*, **10**, 35-47.)
- 及川 恵・坂本 真士 (2008). 大学生の精神的不適応に対する予防的アプローチ——授業の場を活用した抑うつの一次予防プログラムの改訂と効果の検討—— 京都大学高等教育研究, **14**, 145-156.
(Oikawa, M., & Sakamoto, S. (2008). Preventing mental health among undergraduates: The effects of using a revised primary prevention program for depression in university classes. *Kyoto University Researches in Higher Education*, **14**, 145-156.)
- 大島 希巳江 (2006). 日本の笑いと世界のユーモア——異文化コミュニケーションの観点から—— 世界思想社
(Oshima, K.)
- Radloff, L. S. (1977). The CES-D Scale: A self-report depression scale for research in the general population. *Applied Psychological Measurement*, **1**, 385-401.
- Richards, K. C., Enderlin, C. A., Beck, C., McSweeney, J. C., Jones, T. C., & Roberson, P. K. (2007). Tailored biobehavioral interventions: A literature review and synthesis. *Research and Therapy for Nursing Practice*, **21**, 271-282.
- 島 悟・鹿野 達男・北村 俊則・浅井 昌弘 (1985). 新しい抑うつ性自己評価尺度について 精神医学, **27**, 717-723.
(Shima, S., Shikano, T., Kitamura, T., & Asai, M. (1985). New self-rating scales for depression. *Clinical Psychiatry*, **27**, 717-723.)
- Smith, T. W., & Frohm, K. D. (1985). What's so unhealthy about hostility? Construct validity and psychosocial correlates of the Cook and Medley Ho Scale. *Health Psychology*, **4**, 503-520.
- Ziv, A. (1984). *Personality and sense of humor*. New York: Springer Publishing Company.
(ジップ A. 高下 保幸 (訳) (1995). ユーモアの心理学 大修館書店)

—— 2009. 7. 3 受稿, 2010. 9. 4 受理 ——